

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 本文は、渡辺裕『サウンドとメディアの文化資源学——境界線上の音楽』（春秋社 2013年）からの抜粋(約3,800字)である。出題箇所は、モーツァルトの命日にウィーンの聖シュテファン大聖堂で「《レクイエム》」を演奏するという宗教行事が、CD等のメディアを媒介に「音楽」として受容されるようになったという状況の紹介から始まる。ここに見られるのは、典礼か音楽かという二項対立的な問題ではなく、音楽を含む典礼全体を「鑑賞」の対象とする姿勢である。このことは「芸術」全般に指摘できるとして、筆者は、あらゆるものが「音楽化」「芸術化」される状況において、その動きの周辺に働いている力学や「音楽」「芸術」を自明の概念として存在させるメカニズムへの批判的な意識が必要だとしている。受験者は学校教育の中で授業科目として「音楽」や「美術」を学んでいるが、その「音楽」などの概念が、最初から「ある」のではなく形成と変容を経てそのように「なる」ものなのだという筆者の主張に理解が及ぶよう、問題を設定した。問1は漢字問題。問2～問5は本文読解の問題。問6は「書くこと」に関わる問題である。

問2では、筆者の立場を問うた。本文理解の導入として適切であった。問3・問4では、本文に即して筆者の主張を的確に理解しているかどうかを問うた。選択肢の検討を通して本文の理解を深めていくねらいもあったが、正答率は3～4割台にとどまった。問6は推敲作業を通して文章作成能力を問うた。正答率は高く、(i)～(iii)のいずれも7割を超えていた。

第2問 本文は牧田真有子の「棧橋」(2017年発表)による。16歳の高校生である主人公の実家には、年の離れた「おば」(母の妹)が同居している。昔から並外れた演劇の才能を発揮していた「おば」は、「風来坊」的な生き方をしており、その存在や個性は主人公と周囲に影響を与えていた。本問は、その状況や登場人物の関係性を、主人公の様子を軸とした叙述から読み取らせる出題とした。

問1は、小説の読解に関わる語句について、辞書的な意味を踏まえつつ文脈上の意味を理解できるかを問うた。(ア)～(ウ)それぞれの正答率にばらつきが見られた。問2は、「おば」の演劇的な在り方の特質を理解しているかを問うた。文章理解力を測る問題として適切であった。問3は、主人公との会話における幼馴染の友人の態度から、その背後にある心情を読み取ることができるかを問うた。読解力の力量を測る適切な問題であった。問4は、糸屑を拾う主人公の動作の描写が表している内容を読み取れるかどうかを問うた。描写から心情を読み解く力を測る適切な問題であった。問5は、主人公が「おば」に対してどのような認識を持ち、どのような思いを抱いたかについての理解度を問うた。読解力の力量を測る適切な問題であった。問6は、本文の表現の特色を理解しているかを問うた。文章表現についての理解力を測る適切な問題であった。問7(i)(ii)は、【資料】に基づいて教師と生徒が対話する学習場面を踏まえ、本文と【資料】という2つのテキストから登場人物を捉え直すことができるかを問うた。(i)(ii)とも下

位層から上位層まで正答率が適切に分布しており、本文の内容や本文と資料との抽象的な事柄を捉える力を測る問題として適切であった。

第3問 本文の「車中雪」は、近世後期の国学者・秋山光彪(1775～1832)によるごく短い擬古物語(掌編和文小説)である。国学者の歌文を集成した天野政徳編『草縁集』(1820年刊)や、光彪没後に門弟たちの手によって刊行された家集『秋山翁家集』(1842年以降刊)に収められている。出題箇所は、「車中雪」のほぼ全文であるが、京都市中から桂の別邸への移動中に見られる登場人物たちの心の動き、雪を含む風景描写、源少将との和歌のやりとり、そして最後に登場する院の預かりによる滑稽な語りの働きなど、起伏と見所に富んでいる。本作品は翻印もなく、近世の擬古文ということで受験者にとってはなじみのないものかもしれない。しかし、登場人物は『源氏物語』の登場人物をモデルに造型されたと見え、さらに『古今和歌集』『うつほ物語』『枕草子』など、『源氏物語』以外の中古の古典文学を踏まえた表現も散見する。出題箇所についても、敬語を含め、古文特有の語句が多く用いられており、古文を的確に読み取る力、またその内容の豊かさを理解する力を確認する上で適切な素材文であった。

問1は、本文の読解に必要な基本的な単語の知識及び、内容を理解する力を問うた。いずれも重要語であったが、特に「とみ」の知識を確認した(イ)についての理解が低かった。問2は、本文の読解に必要な基本的な文法や敬語の知識及び、本文の表現を理解する力を問うた。問3は、登場人物が詠んだ和歌とその前後の文脈を的確に読み取る力を問うた。本文を正しく理解した上で和歌を正確に解釈することが求められていた。問4は、本文中で繰り返される「桂」という表現について解説した文章を用いて、本文を的確に読み取る力を問うた。(i)は比喩表現を用いた和歌について比喩の関係を踏まえながら表現を理解する力を問い、(ii)は情景を描写した本文中の表現を読解する力を問い、(iii)は本文の表現を基に主人公の人物造型や周囲の人物たちの描かれ方を理解する力を問うた。本文を解説した文章を追加で読ませる出題ではあったが、内容は本文の読解に資するものであり、難易度として適正であった。

第3問の得点率は5割弱であった。難易度としては概ね適切であり、共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

第4問 南宋・蔡正孫の『詩林広記』及び南宋・程大昌の『考古編』より、唐の玄宗・楊貴妃の故事にちなんだ杜牧の七言絶句一首(【詩】)とそれに関連する文章四条(【資料I】～【資料IV】)を取り上げ、複数素材問題として出題した。「国語総合」で学習した漢詩・漢文の基礎的な知識を問うほか、【資料】を正確に読み取った上で【詩】の内容理解に適切に活かし、鑑賞を深められるかどうかを問うよう工夫した。

字数は、【詩】が31字、【資料】が157字、合計188字(いずれも句読点等を除く)である。例年に比べて字数はやや少ないが、解答過程で【詩】と【資料】を照合する時間が必要となることを考慮すると適切な文字数であると考えられる。

問1は、漢詩(近体詩)の形式と押韻について基礎的な知識を問うた。問2は、本文読解に必要なとなる語句について基礎的な知識を問うた。問3は、本文読解に必要なとなる文章の書き下しについて基礎的な知識及び技能を問うた。問4は、【詩】の第三句について、複数の【資料】を正確に読み取った上で的確に解釈する力を問うた。問5は、複数の【資料】を正確に読み取った上で、その内容を比較し、相互の関係についての的確に判断する力を問うた。問6は、複数の【資料】を正確に読み取った上で、その情報を活かして【詩】を鑑賞する力を問うた。

第4問の得点率は5割台半ばであって難易度は適切であり、いずれの設問の識別力も高く、共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

### 3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 論理的かつ抽象的な文章の内容を的確に読み取る力や、文章の構成や展開の仕方について考察する力を確認する上で、適切な素材文であったと評価された。問6の「書くこと」に関する問題については、文章を推敲する学習過程を意識した設問であり、難易度としても適切で、問題作成方針にも合致していると評価されたが、一方で、「書くこと」を想定してはいるものの、リード文を正しく理解する「読むこと」の力も求められているとの指摘を受けた。適切なリード文の作成に向けて、今後検討を重ねていく必要がある。また、この問6におけるSさんの【文章】が本文を踏まえたものとして適切かという指摘も受けたが、問2～問5の読解問題と抵触するのを避けるため、筆者の主張を踏まえつつ、自身の経験を基に作品鑑賞について考えるという学習課題を設定した。

第2問 独特な雰囲気を出す「おば」という人間を理解しようとする主人公の心情を中心に描いた文章で、主人公の内面描写が丁寧であり、心情の変化の把握を中心とした文学的文章を読み取る力を確認する上で適切な素材文であったという評価を得た。また、心情説明だけではない問いも多く、設問のバランスが良かったとも評価された。文学的文章を読み取る力や受験者の総合的な言語能力を検査できるよう、引き続き適切な出題に努めていきたい。

第3問 (注)の情報を参照しながら古文の文章を的確に読み取り、本文や和歌を読解する力を確認する上で適切な素材文であり、文章量、難易度とも適切であったとの評価を得た。また、本文中の一語に注目して読みを深める問4については、用意された解説文は本文の的確な理解の一助となるものであり、受験者の深い思考を促すものとして効果的に提示されていると評価された。全体的にも古文の学習成果を見る問題として問題作成方針に合致しており、表現や用語も受験者の混乱を招くものはなく適正で、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていたとの評価であった。問4の解説文は、受験者の本文理解を導くものであったが、解説文の一部に本文の(注)とすべき内容が含まれているのではないかとの指摘を受けた。今後このような出題をする場合、解説文をどの段階で提示するべきか、問題の配置について十分な検討を行いたい。

第4問 【詩】とその主題に関連する4つの【資料】で構成した本問では、各文章の内容を把握する過程で必要となる漢文の基礎的な知識及び技能を問うとともに、各文章の内容を相互に参照しつつ【詩】の鑑賞を深める過程で求められる思考力・判断力・表現力等を問うことができたと考える。提示された文章を丁寧に照合して【詩】を鑑賞する設問及びその選択肢などは、授業改善あるいは生徒の探究的な学びにおいて大いに示唆に富むものであったと評価されたことから、本問が高等学校における学びの成果を測る共通テストとして適切であったことが窺える。一方で、(注)や選択肢をスリム化すること、本文と(注)を見開き1ページに収め閲覧性を高めることについて意見が寄せられた。従来、(注)は必要最小限の記述を旨とし、本文と(注)のレイアウトにも意を用いている。選択肢の分量や形式についても、本文の分量や設問の難易度等を含めた総合的判断の上で調整している。引き続き適切な出題に努めたい。

### 4 ま と め

第1問 本問では、文章を的確に読解する能力を問う問題を設定した。素材文・出題内容・難易度は適切であり、「書くこと」に関する問題は指導事項にもつながる出題の工夫が見られるとの評価を受けた。今後も学校教育における学習過程を意識した問題作成に努めていきたい。また、漢字問題について、字義を問う問題があると望ましいという要望があったが、今後検討を重ね

ていきたい。

第2問 基本的な読解力を判定する上で、内容・分量・難易度において適切な出題であったと考える。学習場面を設定した問7については、【資料】を用いて本文を多角的な視点から読み直す設問になっているとの評価も得た。今後も、受験者にとっての「わかりやすさ」と問いの難易度のバランスを図りながら、問いたい能力を適切に測ることのできる作問に努めたい。

第3問 文法・敬語・単語などの知識を活用しつつ、本文の内容や和歌について考える設問や、本文中の一語に注目して本文の背景を解説した文章を通して読みを深める設問など、古文の学習成果を確認するための問題として適切なものであった。今後も入念に素材を吟味し、受験者の思考力を測れるような作問を心がけたい。

第4問 既述のとおり、本問の形式及び内容は適切であり、難易度及び正答率の分布も適正であった。共通テストとして適切な問題であったと考える。今後も引き続き、知識の理解の質や思考力・判断力・表現力等を問う適切な問題の作成に努めたい。なお、素材の形式や言語活動の取り入れ方については、高等学校における授業の実際を踏まえたものとなるよう、他の大問とのバランスに配慮しつつ検討を重ねていきたい。